

満州

あの夏を忘れない、私の安東

—約言—

北海道 若松 みき江

はじめに

平成十一（一九九九）年八月十日の午前七時五十分、瀋陽北駅発の特急列車「鴨緑江号（セールージャン号）」で、私は夫と共に丹東市（安東市）に向かっていた。そして、列車は予定どおり午後零時十分に、何事もなく丹東駅に到着した。乗車時間は四時間と二十分であった。五十三年前の昭和二十一（一九四六）年の八月、野宿をしながら十四日間、私が命を懸けて歩き続けた道のりであ

る。そのとき私は八歳だった。

一 父の転勤で安東へ

昭和十五年、当時東京証券取引所に勤務していた父（三十二歳）は、家族（母・二十四歳、私・三歳、弟の健太・一歳）を伴って満州に渡り、安東市で生活を開始した。

安東市は、満州国と朝鮮との国境線を描する大河の鴨緑江の河口にあつて、対岸は朝鮮平安北道の新義州市であった。

市内の鎮江山公園の山頂の展望台に立つと、安東市街や鴨緑江大鉄橋が指呼の間に見え、さらにはその向こうの朝鮮の山並みまではつきりと見渡せた。

当時でも、北朝鮮の平壤（ピョンヤン）から新

義州を通り、鴨緑江大鉄橋を渡って安東、奉天（瀋陽）を経由して、新京（長春）へと汽車は走っていた。

弟の健太は、たくさんの車両を連結した蒸気機関車が、大鉄橋を悠然として走る姿を見るのが大好きだった。私は鴨緑江の河原で、朝鮮の女性が布を川水に漬けては、棒でたたいたり足で踏んだりして洗濯をしている様子や、洗濯の終わった布を川原の石ころの上に広げ、夏の陽光を浴びて川風にひるがえるという優雅な風情の光景が、とても美しく感じられて好きだった。

母は、鎮江山公園のたくさんの桜にはるかな故郷に思いをはせ、異国での孤独な毎日の生活に際して心の支えになっていたようです。

洗濯仕事を頼んでいた朝鮮女性から、大蒜んにんにくやキムチを分けてもらっていた母は、二歳のときに小児麻痺にかかって右足が不自由になっていた私に、体力をつけるためにそれらを食べさせてくれました。

その朝鮮女性は、日本の植民地となった母国朝鮮が、日本から創氏改名や朝鮮籍青年の徴兵や、日本語の教育推進と朝鮮語学習の禁止などを押し付けられたことに対して、到底それを受け入れることはできないと、夫と共に安東に逃れて来た人だった。

昭和十六年七月には、二人目の弟祐介が生まれました。その折には、日本から祖母が出産の手伝いに一人でやって来ました。祖母は「中国人、朝鮮人のお店は、きれいではないけれども安くてそのうえおまけしてくれて、人柄がいいね！。でも、中国人は大人も子供も哀しい目をしているよね！」と言っていました。

そして、我が家に手伝いに来る中国人の子供たちを、私たち孫と平等に扱っていました。当時安東にいた日本人は、みんな女の子のことをクニーヤンと呼び、男の子のことをショーハイと呼んでいましたので、最初のころ私はみんな名前がないのかなと思っていました。

祖母はよく近所の日本人に、「おばあさんも、物好きだねえ」と言われていましたが、祖母は即座に次のように言い返していました。「国は違っても、みんなかわいい子供でねえ」と。

母は祖母に「ここに來てから、いつもだれかに見られているような気がして、落着かないのよ！」と言うと、祖母は「そりやそうだろうよ！　ここは中国だ。日本人がなぜ威張っているのやら。中国人のあの目、あの表情が気になるよ！　みんな我慢強いねえ！」と言っていました。その祖母は、九月に日本に帰って行きました。

それから一カ月後に、日本では東條内閣が成立し、十二月八日を迎えるようになりました。

そのような情勢になっても、安東では食糧の不足は起きませんでした。ただ物価だけは少しずつ上昇してきました。

満州開拓団員や開拓の花嫁の姿なども見受けられるようになり、十代の青少年の満蒙開拓青少年義勇軍が日本から続々とやってくる、この安東を

通って満州全土に散って行くようになりました。

二 ハルビンに移り、父出征する

昭和十八年の初夏、父は北滿の中心地ハルビンへ転勤になり、家族を連れて赴任しました。ここは、ロシア革命で赤軍に追われた白系ロシア人たちが開いた都市で、豊かな街路樹の連なる町並み、そして石畳の街路、煉瓦や石で造った建物など、帝政ロシアの面影が色濃く漂っていました。

私たちの住居は、石造りのアパート型式の一階でした。中央の部屋には大きなペチカがあり、窓は三重、床はオンドルという近代的な設備で、お湯が四六時中流れ出ていました。このお陰で、マインス三十度以下となる真冬でも、家の中では寒さ知らずで過ごせました。近くのロシア正教寺院が朝夕に鳴らす時鐘が、よく聞こえました。

ハルビンの中心街キタイスカヤ大通りにも近く、私と健太は大通りにある秋林^{チヤウリン}百貨店の玩具売り場に、よく連れて行ってもらったものです。

日曜日になると、家族一緒にハルビン市街の北

を流れる松花江の中州の太陽島や、河畔のレストランに馬車（マーチヨ）に揺られて食事に行きましたが、私には何よりの楽しみでした。

真冬になると、枯葉の落ちた街路樹にできた樹氷が、太陽の光できらきらときらめく美しい様子に、我を忘れて見入ってしまった。さらにそれに風が吹くと、「シユリ・シユリ」と幻想的な音楽を聞くようでした。馬車をひく馬は、吐く息でまつ毛もたてがみも全部凍ってしまった、真っ白になっていました。

昭和十九年四月に、私はハルビン市の桃山小学校に入学し、小学一年生になりました。この年の五月十一日に、三人目の弟幸平が生まれ、姉第四人となりました。

この年の秋、私は遠足で雨に遭い、濡れて家に帰ったのが原因で肺炎になり、それがこじれて肋膜炎を起こし、休学となりました。症状は比較的安定していましたが、翌年の春には元の一年生に復学しました。

昭和二十年五月九日、国民皆兵令によって父にも召集令状（いわゆる赤紙）がきました。母は、「お父さんに、兵隊になって戦えという天皇陛下のご命令がきたのです」と私に言いました。それを横に聞いて聞いていた弟の健太は、「あれ！ 戦争するのは兵隊さんだろう！ お父さんは兵隊さんじゃないよ」と言った。父は「学徒出陣も行われた。軍人の大移動もあった。丙種の僕を招集するとは、この戦争はもう見込みはない。満州という広大な国で、女手一つで小さい子供四人を抱えて生きていくのは、本当に大変だ。できるだけ早く、子供たちを連れて日本に帰ってくれ。満人街に行つて、家財道具全部を売り払うといい。気をしっかりと持って、少しでも高く売りたい。これから金次第になるよ！ 子供たちを頼む、命を守ってくれ。肝心なときに、僕は家族を守れないとは！ 残念だ」と言つて母に詫びていた。そして、今度は私と健太に向かって「お父さんは戦争に行くよ、二人でお母さんを助けてくれ。みき

江は弟たちを守るんだよ。健太はお姉ちゃんの言うことをちゃんと聞くんだ。お前は男だから、お父さんの代わりをしてくれ。約束だぞ！」と言いながら、私と健太の手をぎゅっと握りました。

召集令状がきて三日目の五月十一日、ちょうど三番目の弟幸平の満一歳の誕生日の早朝に、父は馬車から身を乗り出して手を振りながら出征してしまいました。静まり返った朝冷えのハルビンの街に、石畳を走る馬車の車輪のからから回る音と、馬の蹄の音だけがいつまでも響いていました。

三 ハルビンから脱出

父の入隊先は、ソ満国境の孫呉でした。母は父の言い付けどおりに、木綿の普段着などだけを残して、衣類も家財道具もすべてハルビンの中国人に売り払いました。そして、母は残した木綿の着物をほどこいて、私たち四人の子供の服と、自分用のもんぺ、そして余り布で幸平のおむつを縫い、さらに服の裾や襟などにお金を縫い込みました。

一応の準備ができたので、八月十日にハルビン

駅出発と決まり、隣組の組長川添さん夫妻が汽車の切符を買って持って来てくれました。

しかし、八月九日朝、突如としてソ連軍は、飛行機や戦車をもって、各地の国境を越えて侵入して来ました。ハルビンでも空襲警報が発令されて、けたたましくサイレンが鳴り響き、街中を震わせました。住民は恐怖心で声を潜めていましたが、やがて右往左往し始めました。

ハルビン駅は、空襲で貨物駅に被害が出ましたが、それ以外はまだ無事でした。しかし、外に出ることは危険でしたので、十日の日も一歩も外には出られませんでした。せっかく、十日にハルビン駅を出発することにしていましたが、とうとう十日には出発できなくなりました。

翌日の早朝、私たちは母の作ったお握りを詰めたりリュックサックを背負い、水筒を各人で下げて家を出ました。川添の小母さんが、駅まで荷物を持って送ってくれました。

街を行く人は、一様に白茶けた顔をして小走り

に動いていました。真夏の乾ききった道、そこを駆け抜ける馬車、舞い上がる砂ぼこり、道端の草も街路樹の葉も、通り過ぎる家々も、一緒に歩いて駅に向かっていている母の顔も、荷物を持つて連れ立っている川添の小母さんの顔も、何もかもが色を失つて白かった。

ハルビン駅は、駅前広場も、駅構内も大勢の人々でごった返していました。泥にまみれ着衣は裂け、顔や手足には大小の傷を負い血に染まっている人を、多く見掛けました。また、よろけながら歩く人、うずくまっている人、大声で叫んでいる人、「おかあちゃん！ おかあちゃん！」と泣きわめいている子供、この世の修羅場を見るような惨状でした。この殺気立った情景に、私は足がすくみ歩くことができませんでした。この人たちはソ連軍に追われた開拓団の人たちで、佳木斯やハイラル方面などから、馬や馬車でここまでやつこのことと逃げて来たとのことでした。馬や馬車で逃げて来た人でもこんな姿なのですから、馬も馬車も

ない人はどうなってしまったのかと思うだけで、背中に戦慄が走りました。すべての開拓団が、大きな悲劇の真つただ中に放り込まれていたのです。

「奥さん！ これからどうされますか？ 家に戻りますか」と川添さんの小母さんが母に問いかけましたが、それに対して母はきつぱりと答えました。「汽車に乗ります。家はもうすっかり整理したので、お世話になりました。奥様どうかご無事で」プラットホームには、列車が入っていました。

私は健太と祐介の手をぎっちり握り、大人たちに突き飛ばされながら、母に離れまいと必死になつて母の後に従つて、汽車にもぐり込みました。幸いに空席があつて、そこに座りました。ほつとする間もなく、狂つたように泣きわめく女の人の声が、ごった返しているホームを貫いて私にも聞こえてきました。「○○ちゃん！ ○○ちゃん！」と子供を探している叫び声でした。後で聞いた話では、その女の人は北から逃げて来るときに、ソ連軍の戦車に追われて、背中に二歳の子供を背負

い、前に生まれて間もない赤ちゃんを抱いて懸命に逃げていて、途中で馬車に拾い上げられて、ほつとして背中の子供を見ると、子供の首から上がなかったそうです。それから気が狂ってしまったとのことでした。

そんな悲惨な有様を目にした健太や祐介の目は、おどおどしていました。私は私で体がざわざわと震えて止まりません。そのときに、「桃山小学校に行け！」と言う声が入りました。その声に応じてホームの人の波が動くのを、私はぼおつとして見ていました。やがて、汽車はゆっくりゆっくりと動き出しました。

ハルビンの街が見えなくなると、だれもがほつとして深く溜め息をついていました。私の震えもやっと止まりました。「桃山小学校のクラスのみんなはどうしたかな？」ということ、不意に思いました。

四 真夜中の空襲

列車は大平原をひた走りに走っていました。そ

の深夜のこと、突然に爆音が聞こえてきましたが、ソ連軍爆撃機の来襲でした。列車は急停止し、車内の明かりはすべて消されて、乗客はみんな車外に降りて草むらに体を隠しました。しかし、母は私たち子供四人を腕の中に抱え込んで、座席から動こうとしませんでした。一歳の幸平と足の悪い私を、車高の高い広軌の客車から降ろす時間はないと判断して、死ぬときはみんな一緒にと瞬時に考えた行動であつたと、後日に母は話していました。

「歌を歌おう！」と母が言い出し、母子五人はすさまじい爆音の下で「かもめの水兵さん」を声を振り上げて歌い続けました。喉がからからになったところにソ連機は去って行き、みんなは無事に戻って来ました。

八月十二日、列車は新京駅に無事に到着しましたが、この列車は新京止まりとなつて、そこから貨物列車に乗り換えさせられて、十三日になんとか奉天駅にたどり着きました。

五 奉天、そして敗戦

奉天でも、街中に避難民らしい日本人がうじゃうじゃといて、あちこちに右往左往していました。反対に、嬉嬉とした顔の中国人が大勢集まっています、走り回りながら私たちをじろじろと見下していました。

母子五人は、父の元上司の山本さんを頼って、その社宅を訪ねました。

昭和二十年八月十五日の夕刻、山本さんから日本の敗戦を知らされましたが、泣く人はなく、みんな茫然として声も出ませんでした。

社宅でも男の人たちはほとんど出征していて、残っている人は山本さんと高齢の所員のみでした。街は危険な状態なので、女・子供の外出は禁じられていて、男の人で食糧品の買い出しに行くことになりました。「日本が負けて立場が逆転して、初めて中国人の苦しみが分かった」と、女の人たちはひそひそと話していました。

それからの奉天市街は、ソ連兵の暴力行為・略

奪行為が激しくなり、さらには女性に対する行為はエスカレートする一方でした。女性は髪を短くし、顔には炭を塗って汚くし男物の服装をして、少しでも危険を避けていました。しかし、それでも執拗に女性を求めて来るので、遂には自らの決意で身代わりになって、拉致連行されて行った女性もおられました。その人たちの犠牲によって、多くの日本人女性は救われたということ、母は話していました。母はそのことについて心から感謝をしていて、いつも「申し訳ないことだ」と言っていて、その人たちのその後の身を案じていました。

そのころ、中国は対日戦の戦勝の喜びに浸る間もなく、蒋介石の率いる国民党政府軍と毛沢東の中国共産党八路军との間に、覇権を巡っての戦が始まりました。この内戦は日ごとに激しくなり、奉天市内の治安もかなり緊迫してきて、この争いに巻き込まれる日本人もでてきました。

奉天の秋は、一年で最も美しい季節だそうですが、それどころではなく、真近に迫ってきた敵し

い冬を迎えることに對して、母たちは不安を持っていました。

山本さんは、ここ奉天より暖かいし、社宅もしつかりしている安東に移るという考えを、みんなに提案しました。母は、義妹一家もまだ安東にいるし、かつて住んでいたこともあって、すぐに賛成しました。みんなといろいろと話合った結果、社宅にいるほとんどの人が賛成して、みんなで安東に行くことが決まりました。

十月上旬、私たちは安東行き列車に乗ることができました。

六 再び、安東の地へ

訪ねて行った叔母の家は、既に八路軍公安局次長の理さんの公宅として接收されていましたが、叔母一家は理さんの温情で内密に二階に住んでいました。転がり込んだ私たち一家五人は、その二階の一室にかくまわれて暮らすことになりました。

当時の安東では、お金さえあれば食べ物は何でも手に入るといわれていましたが、日本人は仕事

ができず、蓄えも底をつきはじめていました。手持ちの衣類、食器類、家具類からタバコ、豆腐、そして単行本など、あらゆるものを「スイヨー！ スイヨー！」と言いながら売り歩いて、その日の糧を得ていました。

理夫人は、「今日は来客があったから」とか、「今日は祝日だから」とか口実をつくっては、餃子や饅頭や豚肉と野菜のスープなどをたっぷり作っては、私たちに振舞ってくれました。そのお陰で、引き揚げるまでの十カ月の間、私たちは何とか生き延びることができたと言えます。

叔母は優しい人でしたが、叔父はまったく違っていました。幸平が、便所に行くのの間に合わず途中でもらしたり、健太と祐介が喧嘩をしたりなどすると、母に對して冷たく当たり、ときには暴力を振るったりしていました。母はそのたびに「お世話になつているのだから」と言つて、私たちに我慢するように論しました。

しかし、叔父の暴力は次第に高まってきて、ち

よつとしたことにでも神経をいらいらさせて、母を殴ったり蹴ったりするようにしました。母は、殴られても蹴られても叔父の暴力に耐えていて、その姿を見ている私は屈辱そのもので、叔父への恨みは極限に達していました。

母は自分あまり食べずに、私たちに食べさせていました。幸平には、母が嘔んで軟らかくして口に入れていました。そのころ二歳に満たない幸平は、下痢が止まらず歯も生え揃わず、やせ細っていてお腹ばかりが膨らんでいました。

家の前の通りの向こう側は、日本人街と言われ五番通りでしたが、その外れに中国人の李さん一家の八百屋がありました。李さんたちは母に「店の閉まる前に来なさい」と言うので、母は言われたとおりにすると、李さんは「オカネ、イラナイ、イラナイ」と言って、売れ残った豚肉や屑野菜などを渡してくれたそうです。昭和二十年十月から翌年の三月にかけて、日本人避難民は満州全域でひたすら飢えと寒さに耐え続けていました。

そんな一般情勢の中で大勢の人が餓死してしまいましたが、私たちは李さん一家のお陰で生きることができたのです。

母に対する叔父の暴力は相変わらずで、子供たちを守るため極度の緊張感にさらされた母は、次第に精神のバランスを崩して体はやせ細り、起きていられないほどになっていました。「このままでは幸平は死んでしまう！」と言い、深夜異常な行動をするようになってきましたので、私は絶えず母の行動を目で追う毎日となりました。李さんの好意で、ゆで卵をたくさんもらって、満開の桜を見に鎮江山公園に行った日に、母は遂に幸平の首に手をかけましたが、中国人のお巡りさんに止められ、幸平は救われました。

やつと日本への引揚げが開始されることになったとき、母は非常につらい決心をしました。「ひとつだけ、幸平の命をつなぐ道がある」と言って、母は「幸平を自分たちの子供として育てたい」と申し出ていた五竜背の理夫妻に、養子として幸平

を手離すことにしたと話しました。理夫妻は、「幸平は私たちの子供として大切に育てます。名前も中国名にして、中国人としてしっかりと教育します。将来、日本は必ず素晴らしい復興をするでしょう。そのとき、お金ができて、どんなことがあっても、絶対に親の名乗りをしないで下さい。

会いに来ないで下さい。お願いです。約束して下さい。心と心の約束です。このことを中国語で『約言(ユエイエン)』と言います」と言いました。それに対して、母は「分かりました。約束は一生をかけて必ず守ります。幸平を救って下さって、心からお礼を申し上げます。ありがとうございます」と答えました。

爽やかな初夏の日差しの中を、水兵服を着せられた幸平は、養父母に抱かれて馬車に乗って去って行きました。「かあたん！ かあたん！」という幸平の甲高い泣き声が、馬車の音と共にいつまでも聞こえています。「幸平！ ごめんね。母さんに力が無くて！」と言う母のつぶやきは、もう幸

平には届きませんでした。

それから間もなくして、中国共産党政府と国民党政府との間で休戦協定が結ばれ、日本人避難民の葫蘆島からの船での引揚げが決まりました。

母は、もう一度一目だけでよいからと幸平に会いたくなり、五竜背に行きました。義母の理さん
に抱かれた幸平は、母が「幸平！」と呼んでも母
の方に来ませんでした。母は、しっかりと声で
理夫人に「幸平をよろしくお願い致します。約束
は必ず守ります。もう二度と会いに来ません。幸
平！ 元気で大きくなってね。さようなら」と言
いました。

その帰り道で、母は「ちくしょう！ なぜこんなことになるの。ばかやろう。戦争さえしなかつたら。母さんがしっかりといていなかったからだ！
母さんが、戦争しないでくれと言えなかったからだ！ 幸平！ ごめんね。弱かったよ、母さん
は！」と、両手の拳で大地をたたきながら叫んで
いました。そして自分自身もたたきました。

そして、そばにいた私を抱え込んで「でもね幸平は生きている。中国の人たちのお陰だ。ああ！幸平は生きているんだよ。なんとしても、あんたたちを日本に連れて帰るからね。私がしつかりしないと幸平に申し訳ない。幸平はみんなを助けるために、神様が贈ってくれた子だよ。幸平を決して忘れないでおくれ。戦争は二度としてはだめだ。みきちちゃん！分かったかい」と言いました。私は、ただ「うん！」とうなずくのみでした。

私は、母のこの思いを、そして幸平のことを、さらには戦争のあったこの夏を、決して忘れません。

七 安東を發つ

昭和二十一年八月三日、引揚団三百人、大半が高齢者と女・子供でしたが、お金を出し合つて三人の中国人道案内を頼んで、安東を出発しました。安東駅から五竜背駅までは客車でしたが、五竜背駅で線路は途絶して、そこから先は歩くのみでした。来る日も来る日も、野宿しながらの旅で

した。橋の無い川を幾つも渡り、すすきなどの草を抜いて、それを敷いて寝ることもしました。湧水を飲み、蚤や虱に悩まされての引揚行となりました。

途中で、敗残兵と呼ぶ六人の元日本兵に出会いました。彼らは、引揚団を助けて葫蘆島まで行くと言うので、同行することになりました。その中の一人に、大村さんという人がいました。母は祐介を頼みましたが、大村さんは最後まで祐介を肩車にして助けてくれました。「大村さんがいなかったら、三歳の祐介は途中でだめになっていただろうね」と、後で母は言っていました。

真夏の暑い日々、湧水を飲み、中国人農民から野菜などを買ったたりもらったりしながらひたすらに歩き、ゴム靴の底がすり減りそのうちに破れて、五本の足の指が顔を出していました。そうなる石ころが入り、やがて靴は上と下にぱかっとなつて、それを紐で縛って歩き続けたのです。右足の悪い私は、それでもつらいとは思わずに、痛む足

を引きずるようにして母と手をつなぎ、歌を歌って歩きました。

「お手で つないで 野道を行けば……」のとおりでした。歩けなくなることは、死を意味しています。私の周りでも、次々と幼い子供や年若い人が死んでいきました。その様子を見ていた私は、「絶対に死にたくない。死んではだめだ。生きていない」と、切実に思ったものです。だから、どんなにつらくても我慢できたのです。

そんな中でも、空腹はとてつらいことでした。弟の健太は、グループの先頭を切って、長い木の枝で丈の高い草をなぎ倒して進む、男の子集団に加わって歩いていました。最年少ながら、草の実や木の実などを真つ先に見付けていて、それを口に頬張っていました。ときには年上の子を見習って畑の中に入り、トマトやキュウリを勝手に取っては食べているので、私はうらやましく思っていました。が、「お腹の弱い人は死ぬから食べるな！」と、健太はあっさりと言ったのけました。

奉天に近づくにつれて、食べ物を恵んでくれる中国の人が増えてきました。過去に、日本軍によって家族がひどい目に遭った中国人が、「戦争は終わった。みんな同じ人間だ。困っている人を助けるのは当たり前！」と言って食べ物に分けてくれるのでした。「これで命がなくなった。有り難い、何と言ってお礼を言ったらいいのか。謝々。私もこういう人になりたいし、そうありたい。みさちゃんもだよ！」と、母は私の顔を見て微笑みながら話しました。一年ぶりに見る母の笑顔でした。

安東を発って十三日目の八月十六日に、私たちはやっと奉天に着きました。この二週間で、出発時の三百人が百五十数人になってしまいました。

八 引揚船に乗って

昭和二十一年八月十八日、私たち引揚者を満載した無蓋貨車は、葫蘆島に到着しました。

引揚船は、アメリカの上陸用舟艇で「リバイイ」と称されている軍用船でしたが、これに乗るのは

有料ということでした。これには、引揚者はみんな驚いてしまいました。お金のない母は、団長さんに「日本に帰ったら必ずお返ししますから」と必死に頼んで団長さんから借りて、母子四人はやつと乗船することができました。乗船料は大人千二百円、子供一人九百五十円ということで、母は合計四千五十円という大金を借金したのです。日本に持ち帰ることのできる現金は、一人千円のはずなのに、団長さんがなぜそんな大金を持つているのか、不思議に思いました。お金の都合ができなかった人や足りなかった人は、この船に乗ることをあきらめて、いつかは来るであろう無料の船を待つことになりました。安東から生死を共にしてきた人たちとの別れは、本当に悲しく苦しいことでした。

船内では、質素ながらも一日二食の食事が出て、栄養失調で衰弱している引揚者にとっては、とても有り難いことでした。少しずつながら体力が快復して、元気が出てきて、心も落ち着いてきまし

た。しかし大勢の引揚者の中には、その効果もなく死んでしまう人が次々にいて、母は涙を流していました。「ここまで来て命を失うとは、なんて悲しく惜しいことか。日本の国が戦争をしたからだ！」と言葉に出していました。

八月二十四日、引揚船は西舞鶴港の沖合いに停泊し、検疫などを受けた後、八月二十七日にやつと上陸許可が出て、日本の地を踏みました。そこでもDDTの消毒で、みんな真っ白なお化けのようになり、子供たちは面白がっていました。

上陸後、私は嬉しくなり足の悪いことも忘れていて、健太たちと岸壁で遊び海に落ちてしまい、大騒ぎになってしまいました。私を助けてくれた人は、とても若い男の人でしたが、その人は名前も告げずに立ち去ってしまいました。私の命の恩人は、長崎の人らしいということだけしか分かりません。

九 母は約束を守って

母と私たち子供は、母の実家である千葉県我孫

子の正泉寺で、父の帰って来るのを毎日毎日、首を長くして待っていました。その間、母は教師をしながら借金を返していました。

昭和二十二年、父はシベリアから戻って来ました。そして、日本証券業界の戦後処理の仕事に携わった後に、東京証券取引所に復帰しました。その後、札幌市に証券取引所を設立するために、札幌に転勤することになり、戦後生まれた末弟を含んだ一家六人で札幌市に転居しました。

両親は、いつも五童背に置いてきた幸平のことを案じていましたが、理さんとの約言を守り通して、探すことはしませんでした。しかし、戸籍の抹消はしていませんでした。幸平がいつ日本に帰って来てもよいように、そのままにしておくと言っていました。

母は、それからも男の赤ちゃんの泣き声を耳にすると、精神に変調をきたして「幸平が呼んでいる」とか、「泣いている」とか言っては、涙を流していました。父は、そんな母を常にいたわり支え

続けていました。

母は、父亡き後、八十歳半ばまで幸平の安否を気にしていました。

アフガニスタンや、イラクでの戦争により、何の罪もない一般住民が傷ついたり、命を落としたりしている場面をテレビで見ても、怒っていません。「ほら！ ほら！ あれはみきちやんだ。痛そうに足を引きずって歩いている。ほら！ あのしなびたおっぱいを吸っているあの赤ちゃんは幸平みたいだ。ああ、あの男の子たち、とても飢えているよ！」難民となった人々が、様々な荷物を背負ったり手を引いたり、さらにはひどい格好でぞろぞろと山道を歩いている。そして、焚き火をして食べる物の煮炊きをし、野宿をする。寒そうにぼろぼろの毛布をかぶっている老人の姿、これらの画面を見ている母の怒りはなかなか治まりません。「戦争をしたがる悪魔たちめが。いつかは罰が当たるよ。一人一人がしっかりしないと、また昔のようになる。いや！ 昔じゃない。つい昨日の

ことだ。戦争がどんなことか、本当のことを、生き残った人たちは若い人に伝えなければいけないよ！ そうしないと、いつまでも戦争を食い物にしていく人間はなくなるからね！」。私は、辛平を思つて苦しんできた母を、いつもそばでおろおろとして見ていることしかできませんでした。

十 母の言葉

平成十七年八月二十三日の未明に、母は急逝しました。九十歳でした。通夜の席で健太が言った言葉は忘れることができません。「お母さんはね、一生悔やんでも悔やみきれないことが二つあると言っていたよ。その一つは、みきちやんが小児麻痺になり足を悪くして、一生不自由な生活をする事になつてしまったこと。もう一つは辛平を中国に置いてきたことだよって」戦後六十余年間を生きてきた母には、平安は無く、戦争によつて受けた深い悲しみだけを生涯背負つてきたことが、この母の言葉で身にしみて分かりました。母の死によつて、あの時代の影が消えることのないよう

に、私は努めなければならぬと改めて思うものです。戦争の悲劇が世代の変容によつて忘れられていくことの無いように、私はあの夏を忘れずに、子や孫に伝えていこうと心に誓いました。

「戦争の放棄」という日本の新憲法ができたときに、母は九歳だった私に次のように言つたことを忘れません。「もうこれで、日本の男は兵隊に行かなくていい。女も人間として生きていける。本当によかつたよ。なんて素晴らしいことだろう。

これで戦争による犠牲者も浮かばれるよ」さらに言葉を續けて、「敗戦国日本の国民は、すべての人が不戦の誓いを心に刻み、日本国憲法第九条に生きる希望と誇りを持った。この歴史の真実を、次の世代に伝える責任があるよ」と、母は私に幾度も念をおしました。この言葉は母からの重い遺言であり、私や子は孫たちに伝える義務と責任があると、今、ひしひしと感じているところです。

「お母さん！ ありがとう」